

# 小1プロブレム対策を考える4

## — 保護者サポーターの視点から見たS市すこやかプラン4 —

高木 友子<sup>a</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学保育学科

### 【抄録】

本稿はS市A小学校における小1プロブレム対策すこやかプランについて保護者サポーターの視点から報告する第4報である。今年度は、クラスを大きく乱す程ではないが、学年集会や移動時の私語と担任への承認欲求が目立った。担任ローテーションと学級再編成はない方が適応は順調だった。2年次以上では適応が良好な学年もそうでない学年もあった。学級の不適応状態を解消するのに教員のチーム・ティーチングが有効だと思われる。

### 【キーワード】

小1プロブレム 保護者サポーター チーム・ティーチング

## 1. 問題

本稿はS市立A小学校における小1プロブレム対策「すこやかプラン」についての報告第4報であり、プラン実施5年目にあたる内容とその成果について、これまでの報告と同様に、特に保護者サポーターの採用を中心に報告する。

「小1プロブレム」とは小学校新入学児が「学習に集中できない、教員の話を開けず、授業が成立しない等」(東京都教育委員会 2008)の状態を言う。具体的には授業中に立ち歩いたりして、授業や集団活動の妨げとなる児童が複数おり、その対応に教師の手が取られて、クラスの指導に支障が生じたり、問題行動をとる児童に他の児童が影響

されて、授業やクラス活動が成立しなくなったりする状態を示す。このような小学1年生の学級不適応は1990年代後半より報告が見られ、2000年代に入り、「小1プロブレム」と称されるようになった(新保 2001)。

それ以前から学校教育で問題となっていた学級崩壊では担任教師の力量や、教師に対する児童生徒の反抗が発生要因として挙げられているが、小1プロブレムは教師の経験や力量に関係なく生じ、児童の教師に対する態度も反抗ではなく、むしろ、甘えや受容を求めるための問題行動を示すものであることが少なくない。小1プロブレムの発生要因は、1年生の小学校の教育形態への不適応だと考えられている。

東京都教育委員会の平成22年度の調査では、東京都の公立小学校の内、約2割が小1プロブレムを経験している(東京都教育委員会 2013)。

---

<連絡先>

高木 友子 takaki@shohoku.ac.jp

1年生がなぜ小学校の教育形態に不適応となるかと言えば、小学校の教育形態と、入学以前に子どもたちが生活する幼稚園・保育所・認定こども園の保育形態が大きくことなるためである。幼稚園・保育所・認定こども園は、小学校の入学準備教育も担うので、小1プロブレムへの対策・対応は、幼稚園・保育所・認定こども園と小学校の両者に求められ、両者の連携により、教育・保育形態の変化を緩やかにすることが必要とされる。

しかし、立地などの問題から、日常的に交流し、連携することが可能なのは、一部の幼稚園・保育所・認定こども園と小学校だけであり、殆どの園と小学校は、少ない回数、お互いの行事に子どもたちを参加させたり、学校見学を行ったりするのにとどまる。また、都市部では各園から進学する小学校が1校とは限らないため、進学する小学校との連携を経験できない園児も出てくる。2010年度の文部科学省の調査では、何らかの形で小学校との連携が取れているのは、全国の幼稚園の内8割弱にとどまっていた(月森 2013)。

就学準備教育は幼稚園・保育所・認定こども園の義務だが、少子化や家族・家庭の変化を背景にした家庭の教育力の低下により、保育内容の範囲は拡大し、家庭でのしつけの不足の全てを補って、入学に十分な準備教育を園で行うのは難しい。地域のつながりの弱まりを背景に子育て家庭が孤立し、未熟でありながらも支援を得られない養育者は子育てに達成感を得られず、自尊感情が高めることができない。そのような養育者は子どもを受容することができず、子どももまた自尊感情を十分に発達させることができない。また、地域や家庭に必要な関わりを経験できない子どもは社会性を十分に伸ばすことが難しい。このような子どもたちにこれまでの学校文化や小学校のシステムは適合しておらず、一方で、幼稚園、保育所、認定こども園、小学校それぞれは完結しがちであり、そ

れぞれの教育形態の違いは前述のような子どもたちが適応するには困難な段差であり、これらが小1プロブレムの複合的な要因だと考えられる(新保)。

文部科学省は2011年度より小学校1年生の、2012年度より小学校2年生の35人以下学級を実現させ、少人数学級で児童の小学校適応を図った。保育要録による児童の情報交換も義務付けられるようにはなったが、要録そのものの質や活用の状態はさまざまである。小1プロブレムへの効果的な対応として、授業時間の柔軟な使用、補助教員もしくは支援員、ボランティアの配置、座学だけでなく「動的」な要素を授業に多く取り入れることが挙げられ(月森)、試みられている。

首都圏S市にあるA小学校では2011年度より小1プロブレム対策として「すこやかプラン」を実施している。筆者は2011年度、新入学児保護者として自身の子どもと同学年の子もたちの姿を通して、「すこやかプラン」の成果を観察し、2012年度からは、保護者サポーターとしてプランに参加し、小学1年生の現況と保護者ボランティアを中心とした小1プロブレムへの対応とその成果を報告してきた(高木 2013、2014、2015)。2015年度もA小学校では、すこやかプランが実施され、筆者も保護者サポーターとして参加した。本稿ではA小学校すこやかプランの5年目の実施状況と成果を保護者サポーターの視点から観察、報告し、考察する。

## 2. S市「すこやかプラン」について

### (1) A小学校概略

S市は首都圏に在る政令指定都市である。人口は約70万人である。A小学校は、都内ターミナル駅より私鉄急行列車で約30分ほどのところに位置する駅から徒歩15分ほどのところにあり、商業

地区にも近い住宅街の中にある。駅前の商業地区は比較的栄えており、都内への通勤の便もよいことから、最近でもマンションや戸建て住宅の新築が増え、住民も増加してきている。A小学校の現在の在校生は約800名であり、2015年度新入生は約130名、4クラス編成となった。

## (2)「すこやかプラン」内容

A小学校によれば「すこやかプラン」とは「幼稚園や保育園で小さな集団に慣れてきた新入児に対して、小学校での集団生活や学習形態などに自然にとけ込めるように支援するプランのこと」である。2011年度より実施され、2015年度で5年目の実施となる。

「すこやかプラン」の具体的な実施内容は主に次の2項目である。

### ①毎朝の学年集会の実施

### ②保護者サポーターと6年生による新入生支援入学式の翌日から4月中実施される。

学年集会は、全校集会など行事がある朝以外はほぼ毎日開かれる。1年生の教室は例年1階に置かれるが、学年集会の会場の多目的室は別棟の3階にあり、そこまで整列して私語なく、移動すること、集会中やはり私語なく、読み聞かせボランティアの読み聞かせと教員からの訓話を聞くこと、校歌を始めとするいくつかの歌の練習、斉唱を行うこと、また整列して教室に戻ることを日課とした。移動時間を除いた集会時間は30分程度である。これらの日課により、大きな集団での行動を経験し、学習することが期待される。

サポーターとして参加できるのは2学年在校生から前年度卒業生までの保護者である。2015年度のサポーターは筆者を含め、15人ほど（内、経験者5名）であった。

サポーターの職務内容は、児童が昇降口に到着したところから、下校するまでの、児童の生活と

学習の支援である。具体的には、挨拶の手本となり、靴箱やロッカーや机の中の物の整理を手伝い、教室移動やトイレに付添い、給食配膳を援助し、着席したり、授業に集中したりすることが難しい児童を支援する。

シフトはかなり緩やかであり、各人可能な日時に参加する。予め厳密なシフトを組むことはない。ある程度予定が先にわかる者は、前日までにシフト表に名前を記入したり、それを教員がクラスに割り振ることもあったが、確定されたものではないため、サポーターの動きも流動的であり、サポート開始後2,3日で、サポーターが来られた時点でシフト表に名前を記入し、サポートの必要度の高いクラスから入っていくという例年通りの形になった。

記録ノートがサポーター控室に用意され、サポーターはその日特に気になった事柄を記し、教員やサポート同士の情報交換を行った。

サポーターは学校から貸与されたそろいの生成りのエプロンと名札をつける。

6年生は朝の支度と給食の配膳を援助する。

## 3. 保護者サポーターの職務内容詳細

保護者サポーターの職務内容も高木（2013）とほぼ同じである。

登校時の挨拶、昇降口の児童の流れの整理、靴の履き替えや傘の片づけなどを援助する。

教室での机やロッカーの中を整理する。名札の安全ピンを止める援助を行う。

トイレや教室移動に付添う。児童同士が騒ぎすぎたり、暴力的なトラブルが生じたりしないように援助する。

体育時の着替えなどを含む、授業に使う用具の準備が自力でできない児童の援助を行う。長時間着席して座っていることが難しい児童、授業の内

容や教員の指示に注意を払えない児童の注意を促す。

給食の配膳、下膳の援助を行う。

清掃時の指示と援助を行う。

下校時の荷物のまとめを援助し、整列を促す。

#### 4. 2015 年度経過

前年度までと同じく全ての時間のサポートに筆者がつけたわけではない。

今年度は、すこやかプラン開始初日、登校2日目より雨天となり、登校時の昇降口の混雑は甚だしかった。晴天であっても、登下校時は昇降口の狭い空間に児童が集中するので、混雑しやすい。雨天の場合、傘が自力で閉じられない、巻けないという児童が多数生じるので、昇降口での滞留時間が長くなり、混雑がひどくなる。また、登校2日目であることから、まだ自分の出席番号や靴箱の位置がわからず、それを探すのに時間がかかったり、もしくはどう行動してよいかわからず途方にくれて立ち尽くしたりする新入生も多く見られ、これもまた滞留時間を長くし、混雑を悪化させた。登校3日目、プラン開始2日目は雪となり、同様の混雑状態であった。しかし、登校4日目、プラン開始3日目は晴天となり、この日には昇降口の混雑は解消された。つまり、この4日の間に靴箱の位置は把握され、傘の扱いがなくなれば、靴の履き替え自体は支障なく行われた。これは前年度（高木 2015）と同様である。それ以前はランドセルを背負ったままの靴の履き替えでバランスを維持できない児童が多く、履き替え時座り込んでしまうため、混雑が悪化したと思われたが（高木 2013、2014）、昨年度から座り込みが目立たなくなった。また、2013年度までは手前、奥とも新入生の靴箱が並ぶ配置であったが、2014年度より、手前に新入生、奥に高学年の靴箱を配置し

たことが、新入生の一か所への集中と滞留を防ぐ効果をもたらしたようでもある。児童の動線を把握し、それを配慮した環境設定することが児童の速やかな活動を可能にすると推測される。

開始直後以降、4月中の登校時の荒天はなかったため、雨具の扱いが未熟なことによる混雑がいつ頃解消されたかは確認されなかった。

プラン初日は、ランドセルや、体育着、体育館履き、教科書や文具などをしまう場所や連絡袋の使い方などが教員から新入生に教示される。私語をして教示を聞けていない児童も見られ、特に私語をしてはおらずとも教員の教示に集中できない様子の児童も三分の一程いるようであった。「クラス全体への話しかけ」が自分にも向けられていると理解できない児童が少なくないと思われた。

プラン実施2日目、登校時の混雑に続き、まだ荷物の片づけが自主的にはできず、教員やサポーターの働きかけがないと片づけられない児童が多数見られた。これは翌日になると1クラスに2、3名に減じた。荷物の片づけに関してはほぼ2日で学習できたようだ。

朝の学年集会会場までの移動は整列し、私語なく行うように教示されるが、今年度は、私語が多く、教員の指導が前年度までより緩やかであり、サポート終了時期になっても移動時の私語が多いままであった。集会初日の読み聞かせでは、感じたことをその場で口にする児童が複数見られ、例年になく騒がしい様子であった。この傾向は1週間ほど継続した。また、集会初日は集会終了後、クラスへ戻る移動を開始する際に、他クラスの友人に手を振ったり、バイバイと声をかけたりする児童が数多く出て、退出が滞ると共に騒がしくなった。これは集会2日目に教員から控えるよう注意がなされ、少数を残しておさまった。

プラン2日目には、鉛筆など文具の使用の仕方についての説明も教師からなされた。説明時、ま



だ文具に触れるように指示されていないのに文具に触れて説明に集中できない様子の児童がクラスの三分の二程観察された。クラスによっては2週目に入っても教員の指示通りに教科書などの準備ができなかったり、その時使う必要のない文具や名札などをいじってしまったりする児童がやはり三分の二程見られた。期間後半、国語や算数の授業が観察できなかったため、これらの傾向がいつまで見られたかは確認できなかった。

文具に関しては、鉛筆を握りこんでしまうなど誤った持ち方をする児童がクラスに四分の一程見られた。正しい持ち方を伝えるとその場では修正するが、すぐ元の誤った持ち方になってしまい、サポート期間中、はかばかしい改善は見られなかった。

文字や数字に関しては国語や算数の授業で一文字ずつ形や書き順を確認して練習するが、その前からプリントへの記名や日付の記入は求められる。ほとんどの児童が数字と自分の名前は特に援助されずとも入学当初から書けたが、クラスに1、2名は書字を全く習得していない児童がいた。しかし、教員は必ずしもそれにすぐ気が付くわけではなかった。

例年、サポート期間の最後まで援助が必要となる名札の安全ピンの扱いと牛乳パック開きだが、安全ピンの扱いに関しては6年生による支援があったためか、今年度はサポーターへ援助を求める姿は目立たなかった。前日の給食の牛乳パックの接着面を剥がし、平らにする作業はやはり新生児には難しく、1回の説明では手順が理解できなかったり、手順は理解しても指先の力が足りず、パックを開けなかったりする児童がクラスに数名は見られ、サポート最終日でも2、3名が援助を必要とした。

今年度の特徴として、各クラス少数ではあるが、特定の子ども同士のいざこざがサポート期間

ずっと続いた。例年、児童のいざこざは生じるが、例年のようにいざこざが生じやすい組み合わせがあり、席替えなどで改善されるということではなく、今年度は女兒から意図的で不快な働きかけを不特定の相手に行うことによる男女間のいざこざが目立った。男児では、他の児童であったら受け流すと思われるささいな関わりに敏感に反応し、激しく抗議することを繰り返す児童が見られた。これも特定の相手に対してというよりは、誰であっても接触を攻撃的に解釈しがちな様子が見られた。いざこざの多い児童に関しては、教師もサポーターも集中的に関わったが、サポート期間中には状況はあまり改善しなかった。

逸脱行為に対するサポーターからの注意にも女兒が反抗的な態度を示すことが一人ならず複数回観察された。一方でそれらの反抗的な女兒も含み、教員やサポーターの注意を引こうとしたり、スキンシップを求めたりなど大人に甘えようとする行動も2週目ぐらいまで特定の、しかし、複数の児童に見られた。ある女兒は1週目は教師にもサポーターにも注目を求める言動を繰り返していたが、2週目に入ると、「先生じゃなきゃだめ」と教師の関わりを求めるためにサポーターに反抗するという行動も見られた。昨年度より、担任候補の教師の交代がなくなったため、教師と児童の関係性は早期に作りやすくなったと思われる。しかし、ほとんどの児童は4月の時点ではそこまで教師にこだわることなく、サポーターの援助を受け入れていた。サポート最終日近く、色塗り作業に飽きて途中で放棄しそうになっていた児童たちに「完成が見たい」「上手だ」などの言葉かけをサポーターから試みると、素直に作業を続けた。

一部ではあるが、例年よりも自己主張と承認欲求の高い児童が目立ったように思われる。教員からの指導が前年度より緩やかであったこともあり、私語を控えるべき場面でも例年よりざわつい

た様子そのまま、サポート終了となった。

しかし、集団行動の全てが例年より乱れていたわけではない。サポート終了時期、校庭での遊具の使い方の説明があった。例年だと、校庭での説明では多数の砂いじりと説明への注意不足の状態が生じるのだが、今年度は砂いじりをする児童はクラスに2、3名見られた程度で、教師の説明を聞いている様子であった。

その他、同じタオルを洗濯しないまま使用し続けたり、また別の児童は雨の日に紙製の手提げ袋を使用したりなど、家庭の配慮が十分ではないと思われる様子も観察された。このような児童は甘えが強かったり、授業への集中が十分でなかったり、学習のレディネスが十分でなかったりなどの問題が見られた。

総じて1か月のすこやかプランの成果は得られたと考えられるが、完全ではなく、私語が出やすい状態と、特定の児童を中心にいざこざが起りやすい状況が残った。とは言え、新入生たちは小学校の日課と物の扱いや授業のルーティンを理解し、自立的に学校生活を送れるようになった。一部の児童を別にすれば、教師や級友と良好な関係を築き始めた。今年度もクラス再編成と担任の交代はなかったため、入学直後は家に帰りたくて学校にいる間ずっと涙する児童もいたが、児童がプラン実施期間後半に不安定になる様子は見られず、時間がたつにつれ、教員や級友との関係性は深まっていったと考えられる。

今年度も給食と清掃のサポートに参加することはできなかった。

## 5. すこやかプラン終了後の経過

2学期、3学期と1年生の始業前の読み聞かせを観察することができた。4クラス中3クラスは1学期の内に既に読み聞かせを妨げるようなことはな

く、集中して聞けていた。しかし、残りの1クラスでは、2学期の時点では、子どもたちは読み聞かせに興味は示して聞いてはいるものの、それに対する感想としての私語が多く、その結果、全体が読みきかせに集中することが難しくなっている様子が見られた。

## 6. 今年度の特徴

前年度に引き続き、クラスの再編成はなかったので、新入児童と担任教諭との関係性は順調に深まり、初日こそ「家に帰りたくて泣く児童もいたが、小学校に対する著しい拒否的態度は観察されなかった。例年のように頻尿の状態を示す児童は見られたが、それも長期化や重症化することはなく、不適応による身体的不調を訴える児童も見られなかった。前年度と同じく、担任が固定化し、短期間でのクラスと担任の変更をなくすことによって、児童の心身の安定は得やすかったと思われる。

しかし、担任教諭との関係が形成されるに連れて、担任を対象とした承認欲求や自己主張を非常に強く示し、その結果、学級で不適応状態となる児童が観察された。

サポートへの甘えも例年通り見られた。

教員からの指導が緩やかな印象があり、そのためか、例年私語を禁じられていた場面でも私語が完全にはなくならず、大きな声量ではないが、ざわついた感じがサポート期間の最後まで残った。

また、例年はサポート終了時期には大方矯正されていたが、今年度はサポート終了時期になっても誤った鉛筆の持ち方をしている児童が目についた。

今年度も一部の児童で牛乳パックの接着部分を指ではがしたり、名札の安全ピンを扱ったりと、指先の力を必要とする行為に困難が見られ、サ

ポート期間の最後まで援助を必要とする状態のままの児童もいた。

前年度と同様に今年度も、昇降口の同じ場所に新入生が集中し過ぎることを避けるため、1年生と他学年の靴箱を並べる配置がなされ、そのためか、雨天以外の混乱は少なかった。

## 7. 前年度までのプランのその後

2014年度新入生は2年生になった。高木(2015)が報告したように、すこやかプラン途中でのクラス再編成が廃止され、プラン実施が1週間短縮された学年である。短縮されたにも関わらず、プラン終了時には当時の新入生は学校生活にほぼ適応できた。その後、1年次の2学期3学期には一部の児童に友だちとのトラブルが頻発していたが、学級全体の活動が阻害されるような様子は見られなかった。2年進級時に担任が一人持ち上がった。しかし、高木(2015)で論じたように担任の持ち上がりは学級適応の十分条件でも、必要条件でもない。2年次では半分以上のクラスは落ち着いているが、一部、学級崩壊まではいかないが、1年次級友とのトラブルが多かった児童から端を発し、学級内でのトラブルが多発し、落ち着かない様子であると報告されている。

2013年度入学生は3年生になった。この学年の児童は1年生の4月末に学級再編が行われ、一部の児童に不適応が見られたまま、サポート期間を終了している。1年次から児童同士の衝突が多かった学年であり、その傾向は2年生になっても一部のクラスで続き、また、不適応から不登校となる児童も見られた。3年生になり、担任が一新された。低学年のときよりも、学級状態は落ち着いている様子である。

2012年度入学生は入学時から適応のよい学年である。学年内に全く問題が生じないわけではない

が、他の学年と比べると大きなトラブルは見えない。4年生となり、担任は前年度からすべて交代した。新担任のうち、新しく就任した教員に関して、児童との関係作りが順調に行かず、児童の方から学校長に、教員ともっと関わりたいので話し合いを持ちたいという提案があった。そのような状態であっても、学級崩壊には陥らず、教員との交渉を自ら提案する児童の社会性の発達には驚かされた。高木(2015)が述べたように入学当初からの良好な適応が良い適応の循環を生み、継続していると考えられる。

2011年度入学生は5年生となった。この学年は、すこやかプランの第1期生である。1年次は全体としては学校生活に適応できたようであったが、2年次、3年次と一部のクラスで学級崩壊に近い状態が見られた。しかし、4年次に学年担任によるチーム・ティーチングとアクティブ・ラーニングの活用により、3年次までのような学級崩壊状態は見られなくなった。5年生では4年次担任の内1名が持ち上がり、学年チーム・ティーチングとアクティブ・ラーニングが継続され、更に学校全体の方針で、一学年のみの交流にとどまらず、低・中・高2学年ずつの交流が促進されるようになった。学級・学年間の交流も、学級内活動も活発に実施されている。

以上のように年度を超えた経過を観察すると、良好な適応状態は良好な状態を促進し、同様に不適応の継続も見られるが、不適応を改善することも不可能ではない。

不適応状態の改善において、担任の指導は重要な要因と考えられるが、教員の経験や力量は当然のことながらそれぞれ異なる。どのような担任であっても児童の適応を導くためには、担任一人だけの力に頼らず、学年全体、場合によっては学年を超えてチーム・ティーチングを行うことが有効であるように見受けられる。

## 8. 全体的考察

例年通り、新たな環境と生活習慣に遭遇することにより、入学直後の児童には混乱が見られたが、保護者サポーターの支援もあり、生活習慣は早期に新入生に定着した。しかし、鉛筆の持ち方や牛乳パックの処理など、指先を使う作業に関しては一部の児童は約3週間のサポートを経ても正しく行うことが難しいままであった。

すこやかプランは、小1プロブレムの防止において、今年度も一定の成果を治めたとは言えるだろう。

しかし、今年度は学年集会開始時より児童の私語が多く、教室移動時にも例年より多かった。クラス単位の授業を大きく乱すほどのものではなく、プラン終了時までには集会や移動時のものも減少はしたが、例年に比べるとやや騒がしい状態が残るままプラン実施期間が終了となった。一部のクラスでこの騒がしさが残った。

発言のルールを守らず、欲求のまま発言してしまうのは、小1プロブレムの特徴の一つでもある。その点を考えると今年度は軽微なプロブレムが継続したと言えるだろう。

小1プロブレムの原因が、家庭での教育力の低下や子どもの社会経験不足によるものであるならば、それらの問題が根本的に解決し得ない今後、小1プロブレム発生の可能性は増大していくと考えられる。

私語の多さが今年度だけの特徴なのか、今後この傾向が持続、もしくは増大するかは来年度以降の観察が必要となる。

実際には小1プロブレムが教育・研究者間のみならず、社会に知られるようになり、多くの自治体と小学校、保育施設で予防と対策がとられるようになったことにより、小1プロブレムの発生はわずかだが減ったという報告もある（東京都教育

委員会 2013）。

しかし、予防と対策が、プロブレム発生要因の増大を補い得るかは、毎年の1年生の状態の把握と対策とを続けていかなければわからないのである。

昨年度に引き続き、担任のローテーションとクラス再編成をなくしたことは、新入生に速やかな適応と安定をもたらした。しかし、クラス再編成を用いず、全クラスを安定させるためには、入学前の児童の状態の把握が必要である。幼保、認定こども園との連携、児童要録の活用などが期待される。

先行研究で述べたように（高木 2014,2015）、1年次のプロブレムさえ解決されればそれで良いわけではなく、子どもたちが在学全期間、また、進学後も含めて、適応状態を維持することがもちろん望ましい。

2012年度入学生の経過を見ると、入学時の適応状態が良いと学校生活への順調な適応が継続しやすいようである。

一方で、2013年度、2014年度入学生を見ると、小1プロブレムを1年次に改善しても、2年次以降、児童や教員の状態によっては、児童の不適応や学級活動の阻害が再度生じることがわかる。また、2011年度入学生を見れば、小1プロブレムを回避しても、2年次以降、学級崩壊は起こり得ることがわかる。

しかし、やはり、2011年度入学生、2013年度入学生の現在を見ると、問題が生じた学年であっても、教員の体制などによって、適応状態をもたらすこともまた可能だとわかる。

東京都教育委員会は小1プロブレムの対策に教員の加配が効果的であると報告しているが、A小学校の様子を見ると、必ずしも加配ではなくとも担任の連携によるチーム・ティーチングが学級崩壊の対策に効果がありそうだ。つまり、クラスの



問題を担任一人に任せるのではなく、複数の教員が連携して関わっていくことが有効であると思われる。

前述した通り、小1プロブレムの背景に家庭と社会の教育力の低下があるならば、近年の内にプロブレムが解消されることは期待しがたく、むしろその発生の可能性は高まることが危惧される。

不幸中の幸いはプロブレムが知られることにより、対策をとる家庭と保育施設と小学校とが増えつつあることだ。一連の報告から示されるようにプロブレムは決して対応不能の現象ではない。

A小学校でも小1プロブレム対策は継続されるだろうと思われる。来年度以降も報告を継続する予定である。

## 謝辞

昨年度に引き続き、教育サポーターの活動に参加の機会を与えてくださったA小学校の先生方、ならびに児童の皆さん、また、ともに活動した教育サポーターの皆さんに心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 新保真紀子 (2001) 『『小1プロブレム』に挑戦する』  
明治図書
- 新保真紀子 (2007) 『『小1プロブレム』研究の到達点とこれからの課題—学校文化の見直しによる効果のある保幼小連携— 神戸親和女子大学児童教育学研究第26号、教育専攻科紀要第11号合併号、113-129
- 高木友子 (2013) 「小1プロブレム対策を考える—保護者サポーターから見たS市すこやかプラン—」 湘北紀要第34号 41-49
- 高木友子 (2014) 「小1プロブレム対策を考える2—保護者サポーターから見たS市すこやかプラン2—」 湘北紀要第35号 85-92
- 高木友子 (2015) 「小1プロブレム対策を考える3—

- 保護者サポーターから見たS市すこやかプラン3—」 湘北紀要第36号 45-52
- 東京都教育委員会 (2008) 「東京都教育ビジョン (第2次)」
- 東京都教育委員会 (2013) 「小1問題・中1ギャップの予防・解決のための『教員加配に関わる効果検証』に関する調査 最終報告書」
- 月森久江 (2013) 『『小1プロブレム』解決ハンドブック』 講談社

## How to solve the First-grade Problem 4 - Thinking about the S-City Sukoyaka Plan 4 -

Yuko TAKAKI

### **[abstract]**

This is the 4th report from a point of the Parent Supporter's view about Sukoyaka Plan to solve the First-grade Problem at A Elementary School in S City. There was more whisper and more emotional dependence around the assembly this year than before. Children have adapted to school better without teaches rotation and class rearrangement. In the upper grades there are both adaptable classes and a little disorderd ones. Team teaching is an expectable strategy to bring the class order.

### **[key words]**

The First-grade Problem, Parent Supporter, Team teaching